

いのかしら

井の頭公園そぞろ歩き

野川 義秋

卒 塔 婆

少し余裕を持って家を出て

公園の中をつつき通おうと、

決めたのは異動して来て間もなくだった。

中央線は人身事故や車両故障でよく遅れるし

歩道を我が物顔で走る自転車にイライラしなくても済む

もしハンドルに引つ掛けられでもしたら

たまつたものではないからだ。

それに吉祥寺駅界隈の雑踏をいち早く逃れて

勤め前のつかの間を、

人もまばらでゆつたりした空間に身を置く心地よさ。

この感覚を知ったのは四年間勤めた上野動物園だった

ある朝

玉川上水に架かる万助橋の下手まで足を伸ばすと、

こんもりと土を盛つていちだん高くなったところに

大きな板塔婆。

ぎっしりと刻まれた漢文の文字を恨めしげに見やり、

読めないと諦めてその場を離れかけたら

すぐ脇に銅版でできた案内板

.....

松本訓導殉難の碑

大正八（一九一九）年十一月二十日

麹町の永田町小学校秋の遠足

一人の生徒が足を滑らせて玉川上水へ。

落ちたとはかり思つた引率の松本虎雄訓導は

我が身の危険をかえりみず飛びこみ、

急流にのみこまれて殉職、歳は三十三歳

教師のがみとして後世に伝えるために

追悼碑が建てられたという

ペットボトルのお茶をひと口飲み

おもむろに上水の流れを見下ろして

そうだったのかと納得する

ばりばりの若い教師が溺れて死ぬぐらいなら

上流での入水自殺も本当だったろうと。

鯉が狭苦しそうに泳ぐ水底を見ていても

とうてい思い描けなかつたあの有名作家と女性の心中事件  
これからは疑問を抱かずにほとりを歩くことができそうだ

頃は承応二年（一六五三年）

江戸百万都市の飲み水を確保しようと

玉川庄右衛門・清右衛門兄弟が

多摩川の水を江戸に引く一大事業を企てる。

今風に言えば

インフラストラクチュア・ビッグプロジェクト

距離は四十三キロ

かかった工事期間、わずか八ヶ月

工事が嵩み

責任者の上級役人・伊奈半十郎忠治は自死

多摩川上流の羽村から武蔵野台地を内藤新宿の大木戸まで

帯を引いたように自然流下でいつきに下った玉川上水。

足を滑らせて落ちた生徒を助けようとして

殉死した松本訓導や作家太宰治の心中事件から

その流れの凄まじかったことは理解できよう、

しかしなぜ、『人食川』という異名まで貰ったのか

上水の土手の細い流れをただぼんやりと見つめる

おっと、いけない

チャイムまであと七分しかない！

## 夕 闇

野暮用で事務所を出るのが遅くなってしまった。

日もとっぷり暮れて梅雨冷かやけに肌寒い

御殿山歩道橋をのぼり始めると

向こうから階段をのぼってこっちへやって来る二人の老人の姿

「おや、足元灯の蛍光ランプを取り替えてくれたんですね」

「そう言えば、そうだね」

すれ違いざまの会話を聞くとともになしに聞いてふり向くと

橋のまん中で立ち止まって手摺りにつかまり

肩を並べてはるか奥多摩の山並みの方を見つめている様子

「今夜は富士山のシルエツトが見えないですね」

「そうだね。お月さんの加減で、見える時もあるんだけど残念だ」

吉祥寺通りは車がひっきりなしに行き交っているのに、なぜか音がかき消されて無声映画の活動弁士の声のように、二人の会話だけがはつきりとよく聞こえる。携帯をとり出して、メールを打つふりをして耳をそばだてる

「あ、そうそう、忘れてしまつところでした」

「忘れるつて、何を？」

「富士山には月見草がよく似合つというあのことは、人目を忍んで山梨に行った時、私が呟いたのでしたよね」

「記憶違いじゃないのか。『富嶽百系』を書いた時だから、富栄さんにはまだ会つていない筈だ」

「いいえ、あれは私が言つたんです」

「…富栄さんがそう言うなら、そうだったかも知れない」

「ええ、そうに決まっていますよ」

二人の会話が途切れ、思わずその方をそつと見る。

「でも、私が小説に書いたことで後世に残ってるんだ」

「ま、それはそうですけど」

「ことは消えてしまつが、文字にすればずっと受けつがれる」

「ええ、あなたのおっしゃるとおり…」

「驚いたね！ 富栄さんはここを通るたびに必ずそれを持ち出す」

「あらっ、そうでしたっけ？」

顔を見合せて笑いながら手摺りを離れ、寄りそつて歩きます

「それにしてもあなたと私はこうして、

いったいいつまでさ迷い続ければいいのでしょうか」

「何を言うんだ… 生まれて、すみません。死んで、すみません。

これが私と富栄さんの、人として生きた唯一の証しなのです」

「そのとおりですねえ…、父は私を許さないまま天国に行きましたし」

ゆっくりと階段を下りていく二つの影をみつめながら心で呟く

富士山、月見草。生まれて、すみません。富嶽百景、富栄さん

薄ぼんやりと浮かびあがる老夫婦の姿はやがて歩道に出て、

玉川上水に架かる万助橋の方へと向かい、そのまま見えなくなつた。

彼らが立ち止まつたところまで引き返してみると、

着物からしたたり落ちた滴のあとが、点々と夕闇の中に続いている。

「そうか、今日は六月一三日」

気づいた途端、行き交う車やバイクの騒がしさが戻り、

その場に立ち尽くして、玉川上水の方をじっと見つめる。

そして、

今のできごとから逃れるように、急ぎ足になって梅林の石段へ向かう

## むらさき花だいこん

池のほとりから高台の御殿山に向かう  
自然石でできた段々の両脇は、

梅林になっている。

その本数は、大小およそ六十本

あたりは、お茶の水井戸方向も

水生花園の入り口がある弁天橋の袂側も

弁財天の社のあるところも、

こんもりとした大木が生い茂っているので

梅林だけがボツカリと明るい。

白や赤やピンクがかかった梅の花が咲くと

明りが灯ったみたいにもっと明るい

木々の新芽が出そろい

たんぽぽの花が咲く頃になると、

お茶の水井戸側の梅の根元の草むらに

むらさき花だいこんの花壇がお目見えする。

『江戸紫』の染物ほどには濃くはない

うす紫の花がひとかたまりになって咲く。

むらさき花だいこんは

花だいこん オオアラセイトウ

諸葛菜 紫花菜という

いくつもの名前を持つ欲ばりな草花。

生まれは中国大陸、南京の草原

日本が中国と戦争した時、

陸軍衛生材料廠の山口誠太郎廠長が

種を持ち帰り、紫金草の名で広めた花だ

鎮魂と平和の願いをこめたむらさき花だいこんは、

山口誠太郎廠長亡き後も家族に受けつがれて

「平和の花だいこんの会」に発展して

茨城県石岡から全国へと旅から旅に。

その数は百数十万袋

線路沿いや田畑の土手、草原、川原

庭先やベランダなどで咲くようになった

平和の願いを託されたむらさき花だいこんは

春になると全国津々浦々のいたるところで

うす紫の花を咲かせる。

そして、この井の頭公園や玉川上水緑道などの、

公園や霊園のあちこちでも花を咲かせている。

鎮魂と平和の願いをこめて